

岐阜県農業技術センターニュース No.44

トマト独立ポット耕の高度化による多収栽培技術の開発！

当センターで開発したトマトの養液栽培システム「独立ポット耕」の費用対効果を高めるため、収量性をさらに向上させる必要があります。そこで1作あたりの収量20%向上を目標として、新たに独立ポット耕栽培を行う生産者向けとして「密植栽培」、既に独立ポット耕を行っている生産者向け技術として「側枝を利用した整枝法」、「長期CO₂施用」および「接ぎ木栽培」を開発・検証しました。

密植栽培

単位面積当たり収量の向上を目的に、穴トレイを用いた密植栽培を行うことにより、栽植株数が増加（10aあたり慣行2,500株/10a、密植3,125株/10a）し、可販果収量が増加します（2015、2016、2018年の3作平均で26%増加）。



穴トレイによる密植ベンチの様子



密植ベンチを用いた栽培の様子

側枝を利用した整枝法

株あたり収穫果実数の増加を目的に、定植直後および春季以降に側枝を伸ばし、側枝にも1花房着生させることにより、収穫果房数が増加し、可販果収量が増加します（2015年作で20%増加）。



側枝を利用した栽培の様子

長期CO₂施用

光合成の促進を目的に、低温期の燃焼式CO₂全体施用と高温期の液化CO₂局所施用を行う長期のCO₂施用を行うことで、慣行の低温期のみのCO₂施用より可販果収量が増加します（2016年作で8%増加）。また、液化CO₂局所施用により単価の高い秋期の収量が顕著に増加し、収益の向上につながります。

接ぎ木栽培

長期栽培における樹勢強化を目的に、台木品種「アーノルド」を用いた接ぎ木栽培を行うことで、可販果数および可販果1果重の増加により可販果収量が増加します（2014作で13%、2016年作16%で増加）。

開発した技術を生産者個々の経営に合わせ選択することで収益の向上が期待できます！

本県育成花き、トマトの栽培・防除技術、渋柿加工技術をPR！

東海地域生物系先端技術研究会が主催で開催された「アグリビジネスフェアin東海」(令和2年1月28日～29日、名古屋市)において、当センター育成のフランネルフラワーとローダンセマム、トマトの栽培・防除技術及び渋柿の脱渋しない加工技術とその加工品を展示し、PR活動を行いました。



アグリビジネスフェアでの展示

また、同時に「フラワーセミナー in 東海(1月29日)」も開催され、東海4県の花き研究担当者から各県育成品種や開発技術の説明、小笠原誓氏の講演及び花が描かれた浮世絵展示の解説が行われました。当センターは「岐阜県オンラインワン花き育成への取組み」と題して、当センターが取り組んだ成果について発表しました。



フラワーセミナーでの発表

令和元年度農業技術センター試験研究成果検討会で成果を発表！

当センター試験研究成果検討会(令和2年2月19日)を講堂で開催しました。農業経営課からの発表を含め8つの課題の成果を発表しました。また、別の会場では成果の実物展示とポスターによる発表も行いました。

各地域の生産者、JA・市町・農業普及課職員など約100名の参加があり成果の活用方法や普及段階での課題、試験への要望等について多数の意見をいただきました。成果の普及については関係機関と連携・協力しながら迅速に行うとともに、いただいた意見を参考に研究開発や技術支援を進めてまいります。



人事異動(令和2年4月1日付)

よろしくお願ひします。

転入者	新所属	旧所属	転出者	新所属	旧所属
塩谷 哲也	野菜部専門研究員	岐阜農林事務所	神田 秀仁	農業経営課(岐阜市駐在)	作物部主任専門研究員
松浦 香絵	土壌化学部専門研究員	岐阜地域環境室	小川 幹夫	中央家畜保健衛生所	土壌化学部専門研究員
宮崎 暁喜	病理昆虫部専門研究員	農産物流通課	神谷 克巳	産業技術課	病理昆虫部専門研究員
小椋 正大	作物部主任研究員	中濃農林事務所	小田 桃子	飛騨農林事務所	野菜部研究員
大原 藍	花き部研究員	新規採用(土壌化学部)	高橋 宏基	西濃農林事務所	作物部技術課長補佐(再任用)
木下 確	土壌化学部農業技手	(花き部)	河村 孝司	西濃農事務所	総務課主任(再任用)
浜崎 陽一	果樹・農産物利用部技手	(果樹・農産物利用部)	後藤 啓二	(退職)	野菜部農業技手(再任用)
鈴木 尚司	土壌化学部農業技手	(再任用)			
市橋 秀幸	作物部主任研究員	(再任用)			